

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-18

ポリネシア・サモアの観光開発と伝統芸能

山本, 真鳥 / YAMAMOTO, Matori

(出版者 / Publisher)

財団法人ユネスコ・アジア文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

ACCUニュース

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2005-03

ポリネシア・サモアの観光開発と伝統芸能

山本 真鳥 法政大学教授

1978年に最初にサモアを訪れてより、既に25年を超えているから、私のサモアとおつきあひも長く続いているものだ。サモア独立国は、ポリネシア ハワイとニュージーランド、イースター島を結ぶ三角形の内側の海域の島々の西端に位置するサモア諸島の西半分である。以前は西サモアという国名であった。東半分はアメリカ領となっている。1962年にニュージーランドから独立して、現在人口は18万人弱。アメリカ領サモア、アメリカ合衆国、ニュージーランド、オーストラリアなどに移民コミュニティをもち、その送金は国の貿易収支を大きく支えている。

サモアの観光開発

初めてサモアを訪れた頃、観光開発はほとんど進んでいなかった。ハワイ経由でここを訪れた私の眼には、政府が観光開発を行っているとはとても見えなかった。首都アピア市のビーチロードに面して、サモアの伝統的家屋の様式を取り入れたビクターズ・ビューローのオフィスがあったが、しみのついた地図や無効になったホテルの料金表などが雑然と並んでいるだけで、相談に乗ってくれる係員も不在のことが多かった。

経済開発庁に行くと、この国の経済開発思想と観光開発は相容れないかもしれない、というエコノミストがいた。人々は観光客のもたらす社会への影響を重く考えていた。アフロヘアや肌も露わな衣類に代表されるような、老人を敬わず秩序を守らない若者たちが社会にもたらす影響を恐れていた。若い旅行者たちがサモアの習慣を知らぬまま傍若無人にふるまうこと

もいやだし、そうした行動様式をサモアの若者がまねるなら、それはさらに恐ろしいことであると考えていた。

しかし、1990年代になると、新しい経済開発リーダー（当時経済開発大臣、現首相）がこの問題に取り組み、観光開発が新たな外貨をもたらすこと、十分コントロールすれば観光が社会に害を流すことにはならないことなどを強調して人々を説得して、一連の観光開発事業が始まった。

まずは、浄化美化キャンペーンをし、市内の清掃を行い、島一周道路の沿道の家々に花などを植えることを奨励した。また、政府観光局の予算を強化し、海外での集客キャンペーンを行った。民間での観光開発も奨励し、開発計画にも前向きの検討を行ったために、コテージ、ホテル等の民間事業が増加した。それら新しい事業にあわせ、1992年より、テウイラ観光フェスティバルという催しを、観光局主導で開始した。

テウイラ観光フェスティバル

テウイラとは、ショウガ科の植物で、英語ではジンジャーと呼ばれている、美しくまた香りの高い花である。サモアを象徴する花として選ばれたのであろう。

テウイラ観光フェスティバルは、毎年9月の第1週に行われる。様々な催しが、1週間という期間に組まれており、伝統芸能である歌、賛美歌、ダンス、バオバオ（小型アウトリガー・カヌー）やファウタシ（戦闘用大規模カヌー）の競争、クリケットなどのスポーツ、ファイアダンス、プラスバンド演奏、行進、花飾りパレード、ミスサモア・コンテストなどである。これらは、サモアに古来からあるものばかりではな

いが、サモア人がきわめてサモア的であると認識しているものである。

例えば賛美歌。キリスト教は1830年にタヒチから宣教師が到着して初めて福音が伝えられたと言われているが、その後急速にこの宗教はサモア中に広まり、サモア社会の中に埋め込まれていった。日曜日にもなると、善良な男女が正装して教会に行く。安息日の規則を守り、村の広場でスポーツ競技が行われることもない。村の生活の中で、聖歌隊で賛美歌を歌うのは、行い正しい若者の通常の行動である。中には熱心に賛美歌のオルガン練習に打ち込んだり、新しい曲を作ったり編曲したりする者もいる。名だたる教会の聖歌隊が参加して、フェスティバルの開始前夜の日曜日には必ず賛美歌のコンクールが行われる。

クリケットは、イギリスで発達したスポーツであり、サッカー・ラグビーなどと違って全世界に普及することはなかったが、旧英領の植民地には熱烈歓迎された。太平洋においては、旧英領ばかりか、ニュージーランドやオーストラリア統治下の島々では、各地に導入されている。しかも、その地の文化と融合して、その土地なりの新しい慣習や意味付与が行われているところがおもしろい。マリノフスキーの研



ラフォガーツベという伝統的ゲーム。テウイラ観光フェスティバルのために文献をもとに再現した。



第8回太平洋芸術祭でのサモア・チームの演技（2000年ニューカレドニアにて）



（同左）

究で有名なトロピリアンド諸島のクリケットは、博士論文のテーマにもなったし、ビデオ民族誌もある。サモアでは、多くの村がチームをもっていて、村同士の対抗戦に人々は熱意を燃やす。サモアのルールというのがあり、サモアの応援のやり方というのがある。ボールやバットもサモアで作られる。

多くのダンスも、サモアに古来からあったスタイルに近隣の島々のダンスの形を取り入れるなどして、さまざまな融合部分があることは否めない。しかし、これらの融合も既に十分サモア国内では膾炙（かいしや）されており、「伝統化」している。

サモア人が第2次大戦後発明して、観光の場面でしばしば用いられるようになり、現在ではほとんどサモア文化の一部となっているのは、ファイアダンスである。これ以前にナイフダンスという形式があったが、これとて棍棒やオールを振り回すダンスをアレンジして19世紀に開発したスタイルに相違ない。ナイフというのは、棍棒が進化してできたニフォオチ（柄の先にナイフが付き、切った首をぶら下げたといわれる突起がついたサモア独自の武器）のことで、鉄器がこの地域で使われるようになったのは、白人との接触後である。ファイアダンスは、そのナイフの両端に、ぼろ布にベンジンをしみこませた物をまきつけて火をつけ、バトントワリングのように振り回したり、投げあげて受け取ったりして軽業的なダンスをするものである。

最近出版されたファイアダンス考案者の伝記によれば、このダンスはカリフォルニアの国際的なエンターテイメントの場で、戦争直後に生まれたという。何か見せ場をつくることはできないかと考えていたサモア人ダンサーが、インド人の軽業師が火を

吐く芸をしているのにヒントを得て編み出したのだそうだ。

ファイアダンスは、ハワイなどのポリネシアンショーでは必ず演じられるもので、サモア以外の観光場面でもしばしば呼び物として使われる。他のポリネシアン・エスニックのダンサーもこれを行うことがある。しかし興味深いのは、ポリネシアのダンサーが一堂に会する場 例え太平洋芸術祭など では、他のポリネシア人がこれを演ずることはなく、サモア人のみが特権的に演技する演目となっていることである。

観光開発と伝統芸能

さて、観光開発と伝統文化の関係であるが、伝統文化が観光によりダメージを受けるといったサモア人の当初の不安はどうなったのだろう。少なくとも、観光客が若者に悪い影響を与えるという認識は今日存在していない。しかし、観光開発と伝統芸能の関係について、一般的には以下の相反す

る2つの議論がある。

ひとつは、観光開発が伝統芸能を変容させてしまうというもので、観光開発にはネガティブな意見である。観光客は訪問地の地誌を事前に詳細に知ることは少ないが、そこに関して何らかのイメージを抱き、何らかの期待する経験を得ようとしてやってくる。観光収入を得ようとする側は、より多くの集客のためにその期待に添った演技をすることになり、その結果伝統芸能は安っぽい変容を受けてしまうのである。観光は伝統芸能を変容させるから害毒を流す存在であるということになる。

しかし一方で、観光を伝統芸能の保護者とする考え方もある。観光開発のために、既に「死に体」であった伝統芸能を、何とか救い出し陽の当たる場所に置くことができる。現地の人々が全く顧みなかったものを、観光客が好み、それに金を払うからという理由で保存が成り立つ。伝統芸能の後継者たちも、これで生活が成り立つから、安心して伝統芸能の保護の道に進むことができる。このような観点からすれば、観光



テウイラ観光フェスティバルでの伝統的ダンス。男性のみの編成の他、男女の混合編成も女性のみの編成もある。

は伝統芸能の救世主ということになる。

このフェスティバルはさて、どのような結果が出ただろう。

フェスティバルに出場する人々は、大半がプロではない。現在のところ、観光客相手にダンスや歌を見せて、生活を成り立たせている人はほとんどいない。ホテルのフロアショーの場合、出演者はホテルの従業員の若い男女である。サモアではもともと、学校教育の場でダンスの練習が行われるし、村の教会の資金集めの行事や村同士の親睦交流などの場面でダンスを見せることが行われてきたので、ダンスの上手な人は多い。しかし、70年代の終わりから10年ほどの間、ときどき若者の演技を見るたびに、次第に技能が欠けていっている印象があった。

例えば、ファアタウパチというダンスがある。これは、別名モスキート・ダンスと呼ばれるものだが、男性が勇壮に飛びはねながら体のあちこちをたたいて踊るもので、体にたかる蚊をたたきつぶそうとしているようだとして、この名で呼ばれる。これはかなりの練習をして初めて踊れるものだが、70年代にはしばしば見かけたのに、80年代の終わりには既に余り見られなくなっていた。資金集めなどで踊るとき、訓練した若者の集団を踊らせる代わりに、村の中の親族集団ごとにフリースタイルのダンスをさせて主に家族間の競争原理で献金をつくるなどの簡便方式に移行しつつあった。

しかし、このフェスティバルの中で伝統的ダンスがコンペティションのひとつとして位置づけられたために、人々のダンスには磨きがかかってきた。賞金も結構な額である。半年前から、コミュニティの事業として毎日夕方に集まって1時間ほど練習を行っているのだから、上手にもなるわけだがまた、そうした練習はサークル活動のようで和気あいあいと楽しそうだった。ダンスばかりではなく、伝統的歌謡、賛美歌など、多くの伝統芸能やスポーツはこのフェスティバルによって盛んとなっていることもしかりである。

フェスティバルのおかげで伝統芸能にテコ入れが行われたといってよいが、そこには複雑なねじれ構造がある。フェスティバル自体は観光客誘致が公式の目的であり、そのためにフェスティバルに公的資金を投入しているが、フェスティバルを最も楽し

んでいるのは実はサモア人自身である。フェスティバルの内容自体は、かなり高度なサモアの伝統芸能であり、予備知識のない一般の観光客が細部に至るまで楽しめるものではない。1~2時間も見たら「ごちそうさま」である観光客の期待レベルからいうと、出来過ぎのエンターテインメントである。観光客相手を通り越した伝統芸能祭の様相を呈しているテウイラ・フェスティバルは、観光客誘致に成功しているかという点と確実な答えを得ることは難しいが、伝統芸能の保護は確実に進んでいるといえよう。

しかし、そうした伝統芸能の保護は、実は将来海外コミュニティのサモア人たちの帰省観光が行われる可能性を考えれば、決して無駄ではないし、必要な投資である。現にこれを見るためにやってきた海外からのサモア人に数多く出会っている。一般的な観光客と違って、彼らは既にサモア文化について予備知識も、細部に関わる期待もある。既に彼らの帰省観光は目立たない形で始まっている。海外移民が、本国と同数以上に存在している今日、将来的には彼らが観光客の主役となってもおかしくはない。

ミスサモア・コンテストとサモア世界

そのようなテウイラ・フェスティバルの行方を端的に物語っているのがミスサモア・コンテストである。もともと独自に行われていた催しを、このフェスティバルは目玉の一つとして統合した。フェスティバルの開会式に始まり、ミスサモア候補者たちはさまざまな会場に登場して愛嬌を振りまき、フェスティバルのフィナーレとして、最後の土曜日の夕刻にクライマックスのコンテストに出演する。コンテストは、世界中のサモア人コミュニティから参加可能で



2003年のフェスティバルで優勝したアメリカ領サモアから参加したダンスグループ

あり、オーストラリアや、ニュージーランド、ハワイ、カリフォルニア、ユタなどから毎年2~3人の候補者がやってくる。かつては、水着姿を見せるなどの部分もあったが、現在では、サモアの民族衣装や、サモア素材のファッションショー、サモアン・ダンスなど、サモア的な形が重視されるようだ。この催しは既に、海外コミュニティも含んだサモアン・ワールドの行事なのである。

テウイラ・フェスティバル自体、ダンスグループやスポーツチームにも海外のサモア人コミュニティからの参加がある。グレイター・サモアン・ワールドの中心であるサモア独立国の首都アピアで開催されるこのフェスティバルは、サモア文化のアイデンティティを確立する芸能祭として位置づけることができるのではあるまいか、と私は最近考えている。

やまもと まとり

1982年東京大学大学院単位取得退学。オセアニアを中心とした文化人類学研究に従事。現在法政大学経済学部教授。国立民族学博物館地域研究企画交流センター客員教授。著書に『儀礼としての経済』(弘文堂、山本泰と共著1996年)、編著に『オセアニア史』(山川出版社2000年)、『性と文化』(法政大学出版局2004年)等。



表彰式に花を添えるミスサモア候補者たち。